講演記録

インフォプロと図書館の新たな役割

米国図書館協会の取り組み～Libraries Change Lives

講師　バーバラ・K・ストリプリング博士
（まとめ　山口真也）

平成26年7月31日(木)、浦添市男女共同参画推進ハーモニーセンターにて、米国図書館協会(ALA)前会長である、バーバラ・K・ストリプリング博士を招き、在沖縄米国総領事館・浦添市立図書館主催、沖縄県図書館協会・沖縄県公共図書館連絡協議後援による講演会が行われました。(参加者約120名)

米国図書館協会(ALA)から講師をお招きして開催する講演会は、昨年8月の、バーバラ・M・ジョーンズ博士(知的自由部部長)の講演会につづいて2回目ということになります(ジョーンズ博士の講演会記録は本誌前号に掲載)。前年の講演会では英語を逐次通訳していく形でしたが、今回はヘッドマイクを使った同時通訳での開催ということで、約60分、アメリカの図書館事情についてたくさんの貴重なお話を聞くことができました。

講演の中で私が特に印象に残っていることは、ストリプリング博士がイニシアティブをとって2013年8月にALAから発表された、「Declaration for the Right to Libraries」についてのお話でした。今回の講演会の副題にも「Libraries Change Lives」とありますが、この宣言にも同じサブタイトルが付けられ、桃山学院大学の山本順一先生による翻訳版では「図書館を利用する権利に関する宣言：図書館が生活を変える」と題されています。

(http://japan2.usembassy.gov/pdfs/wwwf-irc-librarieschangelives.pdf, 2014.8.31アクセス)

（提供：在沖縄米国総領事館）

この宣言には、

- ❖ Libraries empower the individual (図書館は個々人に力を与える)
- ❖ Libraries support literacy and lifelong learning (図書館はリテラシーの向上と生涯学習を支援する)
- ❖ Libraries strengthen families (図書館は家族のつながりを強化する)
- ❖ Libraries advance research and scholarship (図書館は研究開発と学術を推進する)

といった力強いフレーズが並んでいます。あくまでも「宣言」ですから、ここに書かれた言葉は図書館の利用者(市民)に向けたものだと思います。しかし、当日のストリプリング博士の講演の様子を、司会席という近い場所から見ていて感じたことは、その言葉が会場にいる図書館員・司書に向けられたメッセージなのではないか、ということでした。

日本の図書館は、館種を問わず、沖縄も含めてどこの地域でも、年々予算が年々削られ、人件費が削減され、コストを抑えるためにその運営が民間企業に丸投げされる動きも出てきています。図書館界全体を覆う「疲れ」のようなものに対して、これらのメッセージは「それでも図書館は大事だ」「私たち(司書)は専門職だ」という「誇り」を取り戻させてくれる内容だと感じました。司書のミッションを分かりやすく、希望に満ちた言葉で表現したこの宣言を会場全体で共有できたことは、この講演会の大きな成果であったように思います。大学の授業でも、司書を目指す若い学生たちにぜひ伝えていきたいと思いました。

講演の中では、ALA が目指す図書館像・司書像が、様々な先進事例とともに紹介されました。例えば、アメリカの公共図書館の中にはボードゲームや日曜大工の工具(電気ドリルなど)、調理器具、楽器を貸し出すところもあり、「資料提供」や「生涯学習支援」という機能を日本よりも広くとらえていることが分かりました。図書館には、文化を保存・提供するだけでなく、文化を生み出す「創造の場」としての機能も重視されており、親子で工作をしたり、3D プリンターを使って楽しむこともできるそうです。集会室では地域社会が抱える様々な課題について利用者同士が議論する場面も多く、これからの司書にはその「ファシリテーター」(facilitator、中立的な進行役)としての役割も期待されているというお話もたいへん刺激的でした。

起業が盛んなアメリカでは、個人のオフィスをもたないビジネスマンにとって、PC やネットワーク回線を無料で使用できる個人ブースが、彼らの起業を支援する機能を果たすようになっているそうです。日本の公共図書館ではなかなかビジネス支援サービスが広がっていないという指摘がありますが、まずはこうした環境の整備から取り組むことが重要であることも気づかされました。

昨年のジョーンズ博士の講演の中でも指摘されていた、「インフォプロ」としての司書の役割についてのお話も興味深く聞きました。若い世代はデジタル機器に慣れているように見えて、実はそのリテラシーは決して十分なものではありません。例えば、インターネットで検索をして得られる情報は、量は多くとも、同じような視点から発信されたものばかりだったりします。図書館の情報資源は複数の視点から集められており、利用者の視野を広げる役割を果たします。また、アメリカでは若者の間にも貧富の格差が広がっており、スマートフォンの小さな画面でしかインター

ネットにアクセスできない人々も確実に存在します。小さな画面では、情報の送り手のメッセージをただ受け入れるだけで、例えば画像の端に写った情報から視野を広げるチャンスを得られない可能性もあります。「スマートフォンがあればよい」と思っている若者に対して図書館が公平な情報アクセスを保障する環境を作っていく、そうした視点を持つことがこれからの司書にとって重要だというメッセージは、経済的な格差が広がる日本において、また経済問題を抱える沖縄にとってもしっかりと受け止めていかなければならないと感じました。

ストリプリング博士による講演会は、7月28日に大阪、29日に東京、31日が沖縄、そして8月1日には福岡、というスケジュールで行われたそうです。この他に、博士は宮城(7月30日)や熊本(8月2日)でも図書館関係者とのセミナーやビデオ会議にも参加しておられます。そうしたタイトな日程の中で、沖縄の図書館界にも貴重なご助言を多数いただきましたことを心から感謝申し上げます。

最後になりますが、講演会の開催・運営にご尽力くださった在沖縄米国総領事館の皆様、仲西正勝館長はじめ浦添市立図書館の皆様にもこの場を借りてお礼申し上げます。

やまぐちしんや：沖縄国際大学